

Title	經書の成り立ち : 昭和四十年五月二十四日懷徳堂春季古典講座講演
Author(s)	木村, 英一
Citation	懷徳. 1965, 36, p. 18-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90408
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

講演と研究

經書の成り立ち

昭和四十年五月二十四日
懷德堂春季古典講座講演

木 村 英 一

一
懷德堂講座も開設以來十數年になり、従つて春季古典講座も、早くも十數回を重ねました。私は毎年、何か經書についてお話をする例になつておりますので、十三經と言われている澤山の經書について、どれも一度は、不十分なが何か申し上げて來ました。もとより經書は、どれも味わいの深い立派な書物ですから、申し上げることはまだまだいくらでもあります。ここで一度、經書全體を見わたして、結局經書とはどういう性質の古典で、それがどうして出來たものか、ということを一考してみたいと思います。

一一

一たい人類の歴史をふりかえつてみますと、相當古くから文字が發明されて、記録とか書物とかいうものが發達して來ておりますが、この事が人類の進歩發達の上に、大きな役割りを果しています。人間と他の動物との違いは、結局どこにあるかといえ、いろいろ數え上げられましようが、つまり人間は、本能とか習性とかいうものだけに頼らないで、常に考えをめぐらし工夫して生活している、そこで始終生活のしかたを改良するので、文化の發達が起りま

す。猿は動物の中で高等なものでしょうが、猿の世界には、發明・發見とか文化の進歩とかはありません。人間はもと猿に近い動物だったでしょうが、道具の發明、火や水の利用の發見、弓矢・舟・車等の發明があり、だんだん進んで機械の發明から原子力利用の發見にまで到達し、地球上を支配する生物になりました。どうして人間にだけこのようなことが出来るのかと言えば、人間が考えて生活するという能力をもっているからであります。しかし一人一人の人間がいくらよいことを工夫しても、その人が死ねばその成果が消えてしまうならば、文化の進歩發達は起りません。ところが人間は社會的動物であつて、一人一人が孤立して生活することは出来ない、どうしても集團をなして、互にもちつもたれつでなければ生きてゆけません。自由だとか獨立獨歩だとかプライバシーだとか、えらそんなことを言つてはいますが、社會を完全に離れては生活できない、社會生活・集團生活をしながら、その中の自由の確保であり、獨立獨歩であり、プライバシーの尊重です。ところで考えて生活するという性質をもつ人間が、集つて社會生活をうまく営むためには、言葉という便利なものが發明されており、それによつて各自が互いに他人の考えや意図を理解しあいます。そこで一人一人の考えたこと工夫したことが、その人が死んでも消滅しないで、社會の共有財産として残ることになり、次の世代の人は、それを學習しそれを參考して、その上に新しい考えや工夫を積み上げて行くことができる、これが文化の發達の起る根本的な原因であります。これを逆に言えば、つまり文化の發達とは、人間の努力や工夫の集積なのであり、その爲めには言葉という道具が非常に大きな働きをしています。ところが言葉というものは、聲を出している間は存在しますが、聲がやめば消えてしまいます。聞いた人の記憶には若干残つても、記憶は薄れもし變形もします。また聲はいくら大きな聲でも、そんなに遠くまでは聞えません。そこで文字が發明され、言葉を記録する技術が發達しますと、知識や情報がずっと長時間、ずっと遠くまで、ずっと正確に傳わることになつて、記録というものが人類の文化の發達に非常に大きな貢獻をすることになつたのであります。

記録と言つても、いろいろの種類がありますが、最も澤山の知識や情報を、最も取り扱ひの便利な形に集約したも

す。猿は動物の中で高等なものでしょうが、猿の世界には、發明・發見とか文化の進歩とかはありません。人間はもと猿に近い動物だったでしょうが、道具の發明、火や水の利用の發見、弓矢・舟・車等の發明があり、だんだん進んで機械の發明から原子力利用の發見にまで到達し、地球上を支配する生物になりました。どうして人間にだけこのようなことが出来るのかと言えば、人間が考えて生活するという能力をもっているからであります。しかし一人一人の人間がいくらよいことを工夫しても、その人が死ねばその成果が消えてしまうならば、文化の進歩發達は起りません。ところが人間は社會的動物であつて、一人一人が孤立して生活することは出来ない、どうしても集團をなして、互にもちつもたれつでなければ生きてゆけません。自由だとか獨立獨歩だとかプライバシーだとか、えらそんなことを言つてはいますが、社會を完全に離れては生活できない、社會生活・集團生活をしながら、その中の自由の確保であり、獨立獨歩であり、プライバシーの尊重です。ところで考えて生活するという性質をもつ人間が、集つて社會生活をうまく営むためには、言葉という便利なものが發明されており、それによつて各自が互いに他人の考えや意図を理解しあいます。そこで一人一人の考えたこと工夫したことが、その人が死んでも消滅しないで、社會の共有財産として残ることになり、次の世代の人は、それを學習しそれを參考して、その上に新しい考えや工夫を積み上げて行くことができる、これが文化の發達の起る根本的な原因であります。これを逆に言えば、つまり文化の發達とは、人間の努力や工夫の集積なのであり、その爲めには言葉という道具が非常に大きな働きをしています。ところが言葉というものは、聲を出している間は存在しますが、聲がやめば消えてしまいます。聞いた人の記憶には若干残つても、記憶は薄れもし變形もします。また聲はいくら大きな聲でも、そんなに遠くまでは聞えません。そこで文字が發明され、言葉を記録する技術が發達しますと、知識や情報がずっと長時間、ずっと遠くまで、ずっと正確に傳わることになつて、記録というものが人類の文化の發達に非常に大きな貢獻をすることになつたのであります。

記録と言つても、いろいろの種類がありますが、最も澤山の知識や情報を、最も取り扱ひの便利な形に集約したも

のが書物であります。ですからどの民族にも、文化の或る程度まで進んでいるところでは、ずっと昔から今日まで、無数の書物が作られ、今日ではますます多量に出版されておりあります。もつとも今日では、文字で書いた書物だけではなく、寫眞・映畫・テープレコード等、皆大切な記録です。私は近頃、圖書館のことに關係してありますが、限られた大學圖書館のことだけを見ましても、世界中の學術情報が、毎週・毎日、洪水のように殺到してまいります。それを何とか急速に整理して利用者に役立てようとする掛りの第一線は、戦場のようなさわざぎです。まことに人類はえらいことを始めたものだと思いますが、これが今日の急速な文化の進歩と非常に深い關係にあるのです。我々は毎日、新聞を読み、ラジオやテレビを使い、雑誌や書物を澤山見ていますので、記録には不感症のようになっていますが、これが無かつたら大變なのです。

三

さて記録の内容ですが、それにもいろいろ種類があります。新聞のように毎日読みすてたらよいものから、多少時間をかけてもよく理解しておくべきもの、また一生のうち、何回でも繰りかえし読み味わつてよいもの、或いは何千年にもわたつて、何世代も人が愛讀して來たところの、時代を超越した價值をもつもの、等いろいろです。この、時代を超えた價值をもつもの、従つて民族あるいは人類と共に生きている生命の長い書物が古典であります。だから古典は、よく言われますように、汲めども盡きぬ文化の源泉で、何時誰が讀んでも、何か味わいがあり、何等かの新しい示唆をうけて参考になる、というような偉い書物です。そしてこの古典の中で、特に或る特定の宗教とか主義とかの原理を示している古典を、經典・經書・聖典・聖書などと言つています。佛教にはお経があり、キリスト教には聖書があり、中國の儒教には經書がある等がそれです。私が毎年この古典講座でお話してまいりましたのは儒教の經書の話で、十三經と言われるように、全部数えると十三あります。この十三の經書でも、時代により事情によつて、

數え方も取り上げ方も違つており、五經とか六經とか、七經・九經・十一經、或いは四書などと言われます。その中でも、五經あるいは六經と四書とが一番大切な數え方で、我が國でも昔から四書五經と呼ばれております。

四書と五經とは、或る意味で少し性質が違います。ご存じのように、キリスト教の聖書には新譯聖書と舊譯聖書とがあつて、この二つは同じ聖書でも少し性質が違います。舊譯聖書は創世紀から始まりマラキ書に終る三十九篇(列王紀略と歴代志略とがそれぞれ上下に分れているので、記録の數は三十七)ですが、これはキリスト教が成立するより以前から、ユダヤ教が傳えた古典二十四書がもとになつており、モーゼの五書と言われる律法や豫言者の書、その他の記録等から成り、紀元前九世紀頃から前一世紀の半頃までの、八〇〇年にわたる長い間にだんだんと出來た記録を含んでいます。新譯聖書の方は、イエス・キリスト自身の教えを傳えた言行録としてのマタイ・マルコ・ルカの三つの共觀福音書に、ヨハネ傳を加えた四福音書から始まり、キリストの弟子達が苦勞して宣教した際の書簡・日記・教團の記録・説教の覺え書き等、全部で二十七の記録を集めたものです。大體、キリスト歿後三・四〇年頃から一世紀の終頃までに書かれたいろいろな記録集で、大まかなところ、一世紀後半に成立したと見られるようです。佛教のお經にもいろいろなものがあるが、大藏經は漢譯だけで言つてもいろいろな版があつて、少ないものでも五千卷、多いものは一萬三千卷もある尠大なものですが、その中で、お釋迦さんの歿後、直接教えを聞いた弟子達が集つて、各自が聞いたところを語り合つて集める、いわゆる結集が行われています。「如是我聞……」「私はこんな風に承つた……」という言い方でべているのが古い形で、論語の「子曰……」というようなものです。こういう形の記録を含んでいる阿含系統の經典が、成立が一番古かろうと言われており、何度か手が増えられたにしても、その原形は釋尊歿後一〇〇年か二〇〇年、つまりアシヨカ王以前のいわゆる原始佛教時代(紀元前四〜三世紀)の成立と見られる、そしてアシヨカ王以後の二・三百年間は、それに基ついて詳しい學理的な研究や論説が展開し、いわゆる小乗部派佛教のアピダルマが澤山できます。その後西曆紀元前後から、それ等の多種多様なアピダルマの中で詳細繁雜に展開した

學理を、深く統一點まで掘り下げて系統的な哲學體系にまとめ上げる事業が發足します。かくてその成果として展開したのが大乘論師の學ですが、その際、その展開の前提として、新しいアイディアによつて佛説を再構成した立派な經典が澤山出來ました。これがいわゆる大乘經典で、般若經・涅槃經・法華經・華嚴經・無量壽經・解深密經・首楞嚴經・勝鬘經・維摩經等々、それぞれ特色を發揮しながら、おそらく西曆紀元前後から二・三世紀へかけて、次第に成立したようです。こんなわけでバイブルとは意味が違いますが、澤山の佛敎のお經の中にも、原始佛敎時代に作られた古い記録の一群と、大乘經典という新しい一群とがあります。中國の儒敎の經書の中にも、キリスト敎のバイブルや佛敎のお經とはまた意味が違いますが、やはり五經という古いグループと四書と呼ばれる新しいグループとがあります。そこで五經と四書とについて少しばかり申し上げてみましょう。

四

四書と五經とのことをのべるに先立つて、もう一つ考えておきたいことがあります。かつて和辻哲郎博士が孔子を論ぜられた時、次のような意味のことを言われました。釋迦・孔子・ソクラテス・キリストは世界の四聖と呼ばれ、一人一人特色はあるが、ともかく長い人類の歴史の中で最も偉い聖人である、ところで偉いと言つてもどう偉いかと言えば、彼等は人類の教師であるのだ、ということです。もし人類は、永遠にこれ等の人に頭をさげて教えを請わねばならぬ、というようなものをこれ等の人がもつていとすれば、これはほんとうに偉い人に相違ありません。しかしそのようなことがあり得るでしょうか。前にも申しましたように、人類の永い歴史には文化の發達ということがありますが、これは無数の人の努力や工夫の積み重ねであつて、他の動物にはないことです。人類の本質的な特長です。しかし積み重ねなものですから、後から生れた者ほど高く積み重ねられた上に立つのは當然です。いくら偉い人が出て大きな仕事をして、後から來たものはそれを踏み臺にしてその上へ積み重ねますから、すぐその人より上へ出

てしまいます。ですから釋迦やソクラテスやキリストがいくら偉かつたとしても、文化生活の水準とか、知識の量とか等のような外形的な積み重ねの結果だけを言えば、我々の方が高いことは勿論で、今では彼等に何も學ぶことはないでしょう。しかしよく考えてみますと、人間の文化の中には、簡單には積み重ねられないものもいくらかあります。早い話が藝能や藝術のような無形文化はそれです。名人である師匠の藝は、師匠と同じ位すぐれた才能をもち、師匠に劣らぬ血みどろの修業をしたものだけが身につけられるのであつて、ほんくらな弟子でも比較的簡單に師匠より高い境地に立てる、などというものではありません。もつともこれは、一部の藝術家という特殊な人々にだけ見られることで、他の分野に通用するものではありませんが、すべての人に例外なく通用する最も重要なこととしては、人生の生き方についての問題があります。前にも申しましたように、人間は社會的動物であつて、集團をなして持つたれつでなければ生きてゆけません。しかし一人一人がそれぞれ個性のある自分の生命をもつており、自分の生活は自分で生きるよりしかたがない、人に代つて生きてもらうわけにはまいません。ですから、人間として自分の生活をどのように生きるのが一番よいか、という問題は、一人一人が例外なくもつている根本問題ですが、これは各自が他人の生き方を参考にしたり、自分自身の性質や状態、或いは周囲のこと等を考え合せたりしながら、自分で創作し自分で決斷して生きて行くよりしかたがないのであつて、簡單に人の眞似をしたり人に頼つたりして済むことではありません。ところでこういう點になると、他人には通用しない獨自の道でありながらも、ほんとうに深く考へ、よく工夫して、人生を立派に生き抜いた人の例は、古今を論ぜず、洋の東西を問わず、すべての人にとつて参考にもなり教訓にもなります。思うに釋迦・孔子・ソクラテス・キリスト等は、それぞれ性格は違いますが、この上なく立派に人生を生き抜いたという意味で、最も偉い人です。さればこそ彼等の言行や教えの記録が、いつまでも萬人の参考になる古典として、永遠の生命をもつています。

五

さて中國は、早くから文化の開けた古い國ですが、そこに生れた孔子は、すぐれた學者として、この文化というものを廣く深く研究してその本質をきわめ、その根本原理として道徳を開發しました。そしてその道において、人類永遠の教師となる程に、立派に人生を生き抜いた人です。ですから彼の最も偉いところは、彼独自の道において、人類の最もすぐれた教師の一人となつたことですが、それと共に、彼の遺した大事業の一つとしては、長い歴史をもつ中國文化の中から、永遠の價值ある記録を選び出してまとめ、それを古典として後代に遺すという文化事業を始めたことが注目されます。そして彼はすぐれた教育者として多くのすぐれた弟子を養成しましたので、この文化事業は弟子達によつて次第に受けつがれ、中國古代の古典編纂事業は、孔子（紀元前六〇五世紀）から始まつて紀元前二世紀の前半まで、三百年以上もかかつて一應完成いたしました。こうして出來た古典群が、いわゆる六經または五經であります。そしてこれは、儒教徒の手によつて孔子の主義に従つて編輯された古典ですから、それが中國民族の古典であると共に、結局それが儒教の經典でもある、ということになりました。また孔子自身が立派な學者であり、教養人であり、政治家でもあり、教育者でもあつた關係上、彼の直接・間接の影響は、學界・政界・教育界等から一般知識人の教養に及ぶまで、多方面にわたつて甚大であり、紀元前二世紀頃から、彼の主義である儒教が普及するにつれて、支配階級である官僚の本格的教養の基準は儒教であることになり、爾來長くこの状態が、最近まで二千年に亘つて繼續いたしました。従つて五經という五つの書物は、古代の中國文化の遺した古典であると共に、儒教の經典でもあり、同時に、中國における本格派教養人の教養聖典でもあることになっています。

一たい六經というのは、易・書・詩・禮・樂・春秋の六つを數えますが、音樂の古典だけは編纂が完成しなかつたので、書物として残つたのは五經だけです。——實は音樂の古典も出來ていたのだが、秦の始皇が書物を焼いた時に

亡んだのだ、という説明もありますが、それは歴史的事實ではないでしょう——。易というのは占いの古典です。古代においては、人生や國家の重大事件に當面した場合には、占いによつて神の意志を問うて決斷したもので、占いは非常に神聖で大切なものでした。何しろ國家や人生の曲り角に當る重大な時の決斷ですから、占いというものは一生懸命に誠意を竭し、あらゆる知・情・意の限りをつくした上で決斷を神意に問うのです。だから易の記録の中には、神秘的な古い用語に雜つて、人間の誠意に基づいて展開した敬虔な言葉や、良識的判斷の辭が澤山含まれています。この點が、易が古典として今日でも愛讀される所以です。書は、後世の參考になるような政治上の古い典故を集めた記録集です。詩は古代の歌謡を集めたもの、禮は社會生活のいろいろの場合における儀式やエチケットについての記録、樂は古典音樂、春秋は古代の歴史的な記録の殘存したものです。この六つで、中國古代文化の遺したすぐれた古典は、大體網羅されていたでしょう。

論語によれば、孔子が弟子に教えた場合の教課目としては、詩・書・禮・樂の四つを取り上げました。文化人・教養人として世に立つ場合、また爲政者として恥かしくない人間となる爲めには、この四課目を必修課目として學習させるがよい、と孔子は考えたのでしょう。ところでこの四つの中で、當時既に書物としてまとまつていたのは、詩と書との二つだけであつたと思います。そしてこの二つの古典は、孔子自身が編輯したもののようです。孔子より一〇〇年程後の孟子の書物の中に、始めて春秋という名が古典として現れます。そしてこの春秋もまた孔子が編纂したという傳説が載つています。つまり古典を整理し編輯しようという孔子の精神に基づいて、孟子の頃までに春秋という古記録が発見され整理されたのでしょう。孟子より更に數十年後の荀子の時になつて、はじめて廣く禮の記録を集めて整理編纂することが行われたようです。そして荀子の書物の非相篇や大略篇に、はじめて易を古典として扱つていきますから、易の古記録を編輯して儒教の古典に仕立てたのは、おそらく荀子もしくはその弟子あたりから始まつたのだでしょう。こうして紀元前二世紀の前半頃までに、書・詩・春秋・禮・易の五つが、儒教の學者の努力によつて、整

理・編輯・補修されて古典として成立しましたが、當然それ等は、儒教の人々にとつては、中國民族の古典であると同時に、儒教の經典として重んぜられました。ついで漢の武帝が、中國全體を一つの中央集權的な大帝國として統治する組織を完成しましたが、その時、武帝は儒教を重んじて國教とし、支配階級である官吏には例外なく儒教を學ばせようとした。つまり儒教主義の中央集權的大帝國を作つたのであつて、儒教は今日の中國の共產主義と同じく、國家社會の政治・教育の指導精神としてのイデオロギーになつたのであります。ですから元來が中國民族の古典である五經が、儒教徒の手で整理編纂された關係で儒教の經典でもあつたのですが、今やそれが、今日の中共でマルクスやレーニンの書物が重んぜられているのと同様に、政治・教育の指導精神を示すイデオロギーの原典——或る意味では憲法——として重んぜられることになりました。そしてこの傳統が、それ以後二〇〇〇年間の中國の歴史における政治方式の型になりましたので、中國の書物の中における五經の地位が、ここで定まつたのであります。

ところが二〇〇〇年という長い歴史の間には、勿論いろいろな事情の變化があります。漢から一〇〇〇年程経つて、十一・十二世紀あたり、すなわち宋時代になりますと、社會もますます複雑になり、文化もますます多角的に進歩して來ましたので、それを治めてゆく政府の中央集權的組織も、ますます官僚組織を強化して能率化してゆかねばならなくなります。勿論その場合でも、五經が政治・制度・教育の原典であることに變りはありませんが、何分にも五經は、どれもこれも古くてむつかしい書物で、その上分量も多く、長い間の學問の發達につれて大層細かい解釋が澤山できています。ですから儒教がイデオロギーで五經が憲法であると言いましても、餘程特別な博學者でない限りは五經全體を讀んで理解することはできず、儒教全體の精神を正しく見極めて掴むことは、一般官僚にはとても出來ないことになりました。その上、佛教や道教が非常な發達をとげて、その深い哲學が儒教を侵して來ます。當然、支配的イデオロギーとしての儒教の側から見れば、これ等とも對抗してゆかねばなりません。そこで五經の簡單なダイゼストを作つて、それさえよく讀めば儒教全體の精神の要點が掴めるようにし、これだけはすべての官僚にマスター

させて、それによつて社會の思想を指導し、統治を能率化することが考えられました。そしていろいろ研究がなされた末に、五經の禮記の中から大學と中庸との二篇を取り出し、それに論語と孟子とを加えて、四書というものが作られました。勿論これには、しつかりした哲學による周到な基礎づけが要るのでありますが、南宋の大學者朱熹などは、この點で非常に功績のあつた人です。こうして南宋以來の一〇〇〇年間は、儒教の經典としては先づ四書が重んぜられる、という風になつて來ました。

六

こんなわけで、四書は古來の五經を中心とする儒教の經典や古典のダイゼスト版である、ですから五經は、今や「中國における本格派教養人の教養聖典」という意味で重んぜられることになりましたが、それに對して四書は、「近代中國官僚の政教綱要書」と言つてよろしいでしょう。ここに政教と申しましたが、政教とは政治と教化です。儒教の傳統的な考えでは、政治というものは、單に支配者が權力を以て民を治めるだけではない、支配者は社會のエリートとしての立派な人間で、人格の上でもすぐれていなければならず、無知な民を教育しながら統治すべきものである、ということです。ですから「官僚の政教綱要書」と言つても、單に事務的な便覧という意味ではなく、「官僚自身が人格を修養して、エリートとして恥かしくない人間となり、立派な政教を行う爲めの憲法」という意味を強く含んでいます。